

内房女房御返事

弘安三年八月一四日 五九歳

内房よりの御消息に云はく、八月九日、父にてさぶらひし人の百箇日に相当たりてさぶらふ。御布施料に十貫まいらせ候、乃至あなかしこ、あなかしこ。

御願文の状に云はく「読誦し奉る妙法蓮華經一部、読誦し奉る方便寿量品三十卷、読誦し奉る自我偈三百卷、唱へ奉る妙法蓮華經の題名五万返」云云。同状に云はく「伏して惟れば先考の幽霊生存の時、弟子遙かに千里の山河を陵ぎ、親り妙法の題名を受け、然る後三十日を経ずして永く一生の終はりを告ぐ」等云云。又云はく「嗚呼閻浮の露庭に白骨仮りに塵土と成るとも、靈山の界上に亡魂定んで覺蕊を開かん」と。又云はく「弘安三年女弟子大中臣氏敬白す」等云云。

夫以れば一乘妙法蓮華經は、月氏国にては一由旬の城に積み、日本国にては唯八卷なり。然るに現世後生を祈る人、或は八卷、或は一巻、或は方便・寿量、或は自我偈等を読誦し、讚歎して所願を遂げ給ふ先例之多し。此は且く之を置く。唱へ奉る妙法蓮華經の題名五万返と云云。此の一段を宣べんと思ひて先例を尋ぬるに其の例少なし。或は一返二返唱へて利生を蒙る人粗これ有るか。いまだ五万返の類を聞かず。但し一切の諸法に亘りて名字あり。其の名字皆其の体徳を顕はせし事なり。例せば石虎將軍と申すは、石の虎を射徹したりしかば石虎將軍と申す。的立の大臣と申すは、鉄的を射とをしたりしかば的立の大臣と名づく。是皆名に徳を顕はせば、今妙法蓮華經と申し候は一部八卷二十八品の功德を五字の内に収め候。譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し。一塵に三千を尽くす法門是なり。

南無と申す字は敬ふ心なり、随ふ心なり。故に阿難尊者は一切經の如是の二字の上に南無等云云。南岳大師云はく「南無妙法蓮華經」云云。天台大師云はく「稽首妙法蓮華經」云云。伝教大師云はく、稽首等云云。阿難尊者は斛飯王の太子、教主釈尊の御弟子なり。釈尊御入滅の後六十日を過ぎて、迦葉等の一千人、文殊等の八万人、大闍講堂にして集会し給ひて仏の別れを悲しみ給ふ上、我等は多年の間随逐するすら六十日の間の御別れを悲しむ。百年千年乃至末法は一切衆生は何をか仏の御形見とせん。六師外道と申すは、八百年以前に二天三仙等の説き置きたる四韋陀十八大經を以てこそ師の名残とは伝へて候へ。いざさらば、我等五十年が間一切の声聞・大菩薩の聞き持ちたる経々を書き置きて未来の衆生の眼目とせんと僉議して、阿難尊者を高座に登せて仏と仰ぐ如く、下座にして文殊師利菩薩、南無妙法蓮華經と唱へたりしかば、阿難尊者此を承け取りて如是我聞と答ふ。九百九十九人の大阿羅漢等は筆を染めて書き留め給ひぬ。一部八卷二十八品の功德は此の五字に収めて候へばこそ文殊師利菩薩かくは唱へさせ給ふらめ。阿難尊者又さぞかしとは答へ給ふらめ。又万二千の声聞・八万の大菩薩・二界八番の雜衆も有りし事なれば合点せられけり。

天台智者大師と申す聖人、妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千丁に書き給ひて候。其の

心は華嚴經は八十卷・六十卷・四十卷、阿含經數百卷、大集方等數千卷、大品般若四十卷・六百卷、涅槃經は四十卷・三十六卷、乃至月氏・竜宮・天上・十方世界の大地微塵の一切經は妙法蓮華經の經の一字の所從なり。妙樂大師重ねて十卷造るを積籖と名づけたり。天台以後に渡りたる漢土の一切新訳の諸經は皆法華經の眷屬なり云々。日本の伝教大師重ねて新訳の經々の中の大日經等の真言の經を皆法華經の眷屬と定められ候ひ畢んぬ。但し弘法・慈覺・智証等は此の義に水火なり。此の義後に粗書きたり。譬へば五畿七道六十六箇国二つの島、其の中の郡と莊と村と田と畠と人と牛馬と金銀等は皆日本国の三字の内に備はりて一つも欠くる事なし。

又王と申すは三の字を横に書いて、一の字を豎ざまに立てたり。横の三の字は天地人なり。豎の一字は王なり。須弥山と申す山の大地をつきとをして傾かざるが如し。天地人を貫きて少しも傾かざるを王とは名づけたり。王に二つあり。一には小王なり。人王・天王是なり。二には大王なり。大梵天王是なり。日本国は大王の如し。国々の受領等は小王なり。華嚴經・阿含經・方等經・般若經・大日經・涅槃經等の已今当の一切經は小王なり。譬へば日本国中の国王・受領等の如し。法華經は大王なり。天子の如し。然れば華嚴宗・真言宗等の諸宗の人々は国主の内の所從等なり。国々の民の身として、天子の徳を奪ひ取るは、下剋上・背上向下・破上下乱等これなり。設ひ何に世間を治めんと思ふ志ありとも、国も乱れ人も亡びぬべし。譬へば木の根を動かさんに枝葉静かなるべからず。大海の波あらからんに船おだやかなるべきや。華嚴宗・真言宗・念佛者・律僧・禅僧等は我が身、持戒正直に智慧いみじく尊しといえども、其の身既に下剋上の家に生まれて、法華經の大怨敵となりぬ。阿鼻大城を脱るべきや。例せば九十五種の外道の内には正直有智の人多しといへども、二天三仙の邪法を承けしかば終には悪道を脱るゝ事なし。

然るに今の世の南無阿弥陀仏と申す人々、南無妙法蓮華經と申す人を、或は笑ひ或はあざむく。此は世間の譬へに、稗の稻をいとひ、家主の田苗を憎む是なり。是国將なき時の盗人なり。日の出でざる時の鬣なり。夜打ち強盗の科めなきが如く、地中の自在なるが如し。南無妙法蓮華經と申す国將と日輪とにあはゞ、大火の水に消へ、猿猴が犬に値ふなるべし。当時の南無阿弥陀仏の人々、南無妙法蓮華經の御声の聞こえぬれば、或は色を失ひ、或は眼を瞶らし、或は魂を滅し、或は五体をふるふ。伝教大師云はく「日出でぬれば星隠れ、巧みを見て拙きを知る」と。竜樹菩薩云はく「謬辞失ひ易く、邪義扶け難し」と。徳慧菩薩云はく「面に死喪の色有り、言には哀怨の声を含む」と。法歳云はく「昔は義虎今は伏鹿なり」等云々。此等の意を以て知んぬべし。

妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし。毒薬變じて薬となる。妙法蓮華經の五字は悪變じて善となる。玉泉と申す泉は石を玉となす。此の五字は凡夫を仏となす。されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり。石變じて玉と成るが如し。孝養の至極と申し候なり。故に法華經に云はく「此の我が二の子已に仏事を作しぬ」と。又云はく「此の二の子是は我が善知識なり」等云々。

乃往過去の世に一^{ひとり}の大王あり。名を輪陀^{りんた}と申す。此の王は白馬の鳴くを聞きて、色もいつくしく力も強く、供御^{くご}を進らせざれども食にあき給ふ。他国の敵も甲^{かぶと}を脱ぎ掌を合はず。又此の白馬鳴く事は白鳥を見て鳴きけり。然るに大王の政^{まつりごと}や悪しかりけん。又過去の悪業や感じけん。白鳥皆失せて一羽もなかりしかば、白馬鳴く事なし。白馬鳴かざりければ、大王の色も変じ、力も衰へ、身もかしけ、謀^{はかりごと}も薄くなりし故に国既に乱れぬ。他国よりも兵者せめ来たらんに何とかせんと歎きし程に、大王の勅宣に云はく、国には外道多し。皆我歸依し奉る。仏法も亦かくの如し。然るに外道と仏法と中^{なかわる}悪し。何にしても白馬を鳴かせん方を信じて、一方を我が国に失ふべしと云云。爾の時に一切の外道集まりて、白鳥を現じて白馬を鳴かせんとせしかども、白鳥現ずる事なし。昔は雲を出だし霧をふらし、風を吹かせ波をたて、身の上に火を出だし水を現じ、人を馬となし馬を人となし、一切自在なりしかども、如何がしけん白鳥を現ずる事なかりき。爾の時に馬^{めみょう}鳴菩薩と申す仏子あり。十方の諸仏に祈願せしかば、白鳥則ち出で来たりて白馬則ち鳴けり。大王此を聞き食し、色も少し出で来たり、力も付き、はだへもあざやかなり。又白鳥又白鳥と千の白鳥出現して、千の白馬一時に鷄^{にわとり}の時をつくる様に鳴きしかば、大王此の声を聞き食し、色は日輪の如し、膚^{はだえ}は月の如し。力は那羅延の如し、謀^{はかりごと}は梵王の如し。爾の時に綸言汗の如く出でて返らざれば、一切の外道等其の寺を仏寺となしぬ。

今の日本国亦かくの如し。此の国は始めは神代^{かみよ}なり。漸く代^よの末になる程に、人の意曲がり、貪瞋癡強盛なれば、神の智浅く、威も力も少なし。氏子共をも守護しがたかりしかば、漸く仏法と申す大法を取り渡して、人の意も直に、神も威勢強かりし程に、仏法に付き謬^{あやま}り多く出来せし故に、国もあやうかりしかば、伝教大師漢土に渡りて、日本と漢土と月氏との聖教を勘へ合はせて、おろかなるをば捨て、賢きをば取り、偏頗もなく勘へ給ひて、法華經の三部を鎮護^{ちんご}国家の三部と定め置きて候ひしを、弘法大師・慈覚大師・智証大師と申せし聖人等、或は漢土に事を寄せ、或は月氏に事を寄せて法華經を或は第三第二、或は戲論^{けろん}、或は無明の辺域等と押し下し給ひて、法華經を真言の三部と成さしめて候ひし程に、代漸く下剋上し、此の邪義既に一國に弘まる。人多く悪道に落ちて、神の威も漸く滅し、氏子をも守護しがたき故に、八十一乃至八十五の五王は、或は西海に沈み或は四海に捨てられ、今生には大鬼となり後生には無間地獄に落ち給ひぬ。然りと雖も此の事知れる人なければ改むる事なし。今日蓮此の事をあらあら知る故に、国の恩を報ぜんとするに、日蓮^{あた}を怨み給ふ。

此等はさて置きぬ。氏女の慈父は輪陀王^{りんたおう}の如し、氏女は馬^{めみょう}鳴菩薩の如し。白鳥は法華經の如し、白馬は日蓮が如し。南無妙法蓮華經は白馬の鳴くが如し。大王の聞き食して色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の南無妙法蓮華經の御音を聞き食して仏に成らせ給ふが如し。

弘安三年八月十四日
内房女房御返事

日蓮花押